



昭和44年(1969年)

10月号 (No. 292)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
エベレスト登山募金のお願い	1
エベレスト通信①	2
第二次隊参加シエルパ	3
1960年寿本隊用の予約シエルパ	3
ネパール登山隊器材の通関	3
バタゴニア大陸水の横断	4
新・爺蘭土雜記②	8
JACクラブ・ソング	8
ニュー・ジランド登山学校日程	9
岡部浩子さんの遭難	9
図書室便り	
新刊図書受入報告	10
定期刊行物受入報告	10
雑誌欠号寄贈願	10
会務報告	
9月理事評議員会	10
第254回小集報告	10
7月海外連絡委員会報告	10
ルーム日誌	11
会員名簿訂正	11
会員異動	11
会員通信	
カトマンズ便り	9
その他	
第10回登山技術講習会	1
第2回図書即売交換会	1
現地小集	1
イタリア山岳会フイレント支部	10
スイス山岳会会章寄贈	10
パキスタン政府の登山許可	11

エベレスト登山募金のお願い

会長 三田 幸夫

とご協力を賜わりたくお願い申し上げます。
次第であります。

敬具

予算総額 一〇〇,〇〇〇,〇〇〇円

収入見込

一〇〇,〇〇〇,〇〇〇円

①国庫補助金

八、五〇〇,〇〇〇円

②報道関係後援金

(毎日新聞社・NHK)

③法人関係募金予定額

五、〇〇〇,〇〇〇円

④参加隊員個人負担金

三〇,〇〇〇,〇〇〇円

⑤本会員関係募金

七、五〇〇,〇〇〇円

計

四、〇〇〇,〇〇〇円

募金要領

本会会員関係は

①振替貯金(同封)

一口(一、〇〇〇)以上

②銀行振込

協和銀行神田支店社団法人

日本山岳会エベレスト募金委員会

口座

第十回登山技術講習会

なお今回の募金は、大蔵省当局に対し、所得税法第八條第九項の特定寄付金及び法人税法施行規則第八條に定める指定寄付金の申請を行っておりますので、会員各位で、これを適用された方ならびに法人関係の募金のご協力を頂けるような場合には事務局までご連絡下さるようお願い致します。

指導委員会は登山技術講習会を左記のとおり開催いたします。これから登山を本格的に始められる方、または中級の方を対象として行います。

親睦を尊重した楽しい集りになりたいと思います。参加資格は、男女不問。

▽期日 十二月五日・七日

▽場所 富士山五合目 御庭小屋宿泊

▽費用 会員五〇〇〇円、非会員六〇〇〇円(東京よりの往復バス代、食費等)

▽講師 山崎安治、広谷光一郎他

▽日程 十一月二十一日、ゼミナール(本会ルーム)
十二月四日午後八時東京発、十二月五日・七日講習、天候

第二回図書即売交換会

第二回図書即売交換会は十月二十五日午後一時から三時まで本会ルームで開催します。三田会長はじめ会員各位から出品をいただき、出品数は昨年以上の多数になり、珍品も少なくありません。同一品に希望者が何人かあった場合は抽選を行い公平を期しております。売値も市価を大幅に下まわりますので、山の古書を求める絶好のチャンスです。なお若溪堂その他ルーム委託図書もとくに定価を割引いて販売するコーナーを設けます。会のネクタイ、バッジー、ペナントなども発売します。多数会員の御来場をお待ちします。

第十二回もみじ会お知らせ

静岡支部の第十二回もみじ会は十一月

現地小集

第二五五回小集会は、現地小集会で箱根ハイキングを行います
時 十月二十五日(土) 一十二時
六日(日)

▽場所 箱根金時山

▽集合場所 十月二十五日午後六時半、箱根芦ノ湖尻黒宮キャンプ場

▽会費 千七百円

▽行事 二十五日懇親会、湖尻黒宮キャンプ場で午後七時から

▽申し込み 本会事務局まで

懇親会は子供からお年寄りまで

おいに楽しみたいと思います。

珍芸、奇芸を御用意の上ご家族

友人ともども御参加下さい。

なお、現地までの交通は次のとおりです。

①東名高速バス(新宿駅西口→桃源台・二時間十分・片道六百十円)

②高速バス(新宿駅西口→元箱根・二時間十分)箱根観光船(元箱根→桃源台・三十分)

③新宿小田急ロマンスカー(新宿→箱根湯本・一時間二十分)バス(湯本→元箱根・四十分)観光船で桃源台へ。

桃源台から黒宮キャンプ場までは徒歩五分、キャンプ場には寝具その他バンガローにそろっています。

月八、九の両日井川西山平井川キャンプ場で行ないます。人員は寝具の都合で六十人。費用二千五百円(静岡、井川バス代、宿泊費、九日朝昼食代を含む)集合は十一月八日十一時半静岡駅表口東名高速バスターミナルJAC旗前、三日前までに静岡支部に申込みのこと、九日は三班に分れ行動します。

エベレスト通信①

第二次偵察隊報告

偵察隊長 宮下 秀樹

第二次偵察隊は八月二十一日にカトマンズ入りして以来、元気に活躍しており目下B・Cへの途上にあります。この間第一信(八月二十三日付)、第二信(八月二十五日付)、第三信(八月二十八日付)、第四信(九月二日付)とカトマンズから四便、更に九月四日付ルクラから第五信がエベレスト登山準備委員会に届いております。

このように筆まめな宮下隊長からは、逐次生々しい現地の模様が届いておりますが、事務連絡的な記事が多いので、ここでは要旨を抜粋して、速報としてお知らせすることに致します。

〔第一信〕 八月二十三日付 (編者)

出発に際しましては、いろいろとお世話になりました。また暑い最中の盛大なお見送り、本当に有難うございました。隊員一同無事カトマンズに到着宿舎のシャンカール・ホテルにおちつきました。

本日二十三日(土)はネパールの休日なので休養しております。そこで出発後の経過をお知らせすることに致します。

二十日夜半にニューデリー着、通関に一時間近くを要して荷物を保税倉庫に入れました。

二十一日朝、日本大使館に挨拶の後、二手にわかれて気象台とIMFにコンタクトしましたが、IMFのサリン氏には同氏が多忙のため三十分間程面談できたのみでした。夕刻十七時カトマンズ着、今西、大塚、両佐藤氏に迎えられてシャンカール・ホテルに入りました。夜、先行隊を、宮下、田辺、中島、

小西、佐藤(之)、植村、大森、木村の八名、後発を、井上、佐藤(毎日)と決定しました。

二十二日早朝今西、大塚氏を見送ってから、ネパール外務省と交渉開始、非常に好意的でかつ信じられない程のスピードで、インポート・ライセンス(空輸分と船便分)を即日貰い(26ドルを要しました)、ビザの延長の話を決めてきました。

午後はヒマヤン・ソサエティ(H・S)行き今回のシェルバを決定してきました。(注、別稿参照)

夜日本大使館主催のタクル新駐日大使のレセプションに五名で出席。シャンカール・ホテルの生活は快適ですが、一日も早くカトマンズを離れるべく努力します。

〔第二信〕 八月二十五日付。

二十四日の午前はトレッキング・ビザの入手。エアー・カーゴの確認、午後はH・Sにて本隊のシェルバ三十名の交渉を行ない、別稿の通り、一応の確保を行ないました。

八月二十四日現在、正式な契約はマカールの43名(これは良いのを集めています)その他は名指しのリザーブですが正式ではありません。ただロバーツのように個人的関係の非常に強い隊は、殆んど正式契約に近いものでしょう。こうやってみると今回の30名の確保はこれで一杯でした。後はナムチュで探さずして他ないでしょう。ただ

ブー・ドルジェやアンツェンIの言でも、エベレストには四、五十名のシェルバ、ローカル・ポーターが欲しいといっており、是非集めたいと思います。

夜はH・Sのチェアーマンのバラズリ氏とブー・ドルジェ、アンカジ夫妻、阪大の玉井君を招いて夕食、アンカジ夫人の独り舞台でした。凄いいんてリです。

二十五日、空輸荷物の連絡のため田辺をカルカッタへ送るべく準備しておりましたところ、ルフトハンザのマネージャーから、夕方便でJMEの荷物があるというので半信半疑ながら、田辺の出発を見合せて夕方まで待つことにしました。

この日の夕方、現代ネパールの奇蹟が起きました。空輸荷物が全部一度に到着。本当に信じられない程でした。ちょうどカルカッタのお祭りである客が僅か三名しかおらず、そのためチャーター機のような扱いとなった訳です。空港で飛行機のドアが開けられ、フォークのマークのワッペンを見つけた時の嬉しさは忘れられません。

夜今後のスケジュールを次のように決定しました。

八月三十日、早朝より二便往復してルクラへ、隊員八名、リエゾン、サード、シェルバ二名、荷物二・三トンを携行の予定。

八月三十一日 ルクラでリバック。

九月一日 ルクラ発ナムチュエ泊。

九月二日 ナムチュエ発タンボチェ(泊)、ナムチュエにてチェックポストと

小学校訪問後第一次キャラバン終了。

九月三日、七日 高度馴化兼休養。

九月八日、タンボチェ発ブロンカル(四・三〇〇m)、第二次キャラバン開始。一部のシェルバ及びポーター

はそのままB・Cへのキャラバン続行。

九月九日 ブロンカル泊。ロブジェ(四・九〇〇m)泊。

九月十日、十三日 高度馴化を兼ねて軽いハイキングと停泊。

九月十四日 ロブジェ発ゴラクシエツ(五・二〇〇m)泊。

九月十五日 ゴラクシエツ発B・C(五・四〇〇m)泊。

九月二十日より完全に行動できるよう調整完了。

ただこの場合、飛行機の飛べない時

はタンボチェまたはロブジェの休養日で調節する予定。

雲はまだ完全にきれませんが、昨二十五日の午後から夜にかけては、すっかり雲がなくなり、日射も強く、白嶺を垣間見たほどです。ホテルの食事待遇も環境もよく、全員元気で出発準備に励んでおりますので安心下さい。

〔第三信〕 八月二十五日付

その後の状況を報告します。二十六日朝、外務省と空港の二手に分れて荷物は無事通関完了。全荷物をホテルに運びました。

二十七日、お祭のため全部休日、夜スケジュールの一部を変更しました。ネパール政府としては、われわれの許可はすべて九月一日以降の処理にしているため、九月一日以降にルクラに飛んで欲しいとのこと。従って天候がよければ九月一日に二フライトの予定です。

二十八日、外務省を訪問し、促進方依頼、サードのミンマ・ツェンがカトマンズに到着したので種々と打ち合わせ、午後H・Sにいきシェルバの契約をファイナルなものにしました。あとは二十九日か三十一日に決まるリエゾンとの話が残っています。

今日午後はお盆のお祭りで大賑わいです。又満月の夜は毎月シンブナートの丘でヒッピーの踊りがあるようです。

ホテル・シャンカールは値段に比して至極快適ですが、千客万来、宮下、田辺、佐藤らは応接に追われていま

す。井上君も今日はカトマンズの気象庁と気象台とでかけ、いい仲間をみつ

けてきました。小西君は登攀用具の点

検に食事を忘れるほど、暇なのは大森

ドクターだけです。雨上がりのカトマ

ンズは、涼しく緑もさわやかにしっ

り落ちついた雰囲気です。

〔第四信〕 九月二日付。

八月二十九日、毎日新聞の佐藤、木

村氏をのぞく八名はトレッキング・パームットを入手、リエゾンにAnu Bikram Ranaがきました。若い警官で新婚早々とのこと、リエゾン・オフィサーとして初参加です。

三十日(土)朝から買出しとキャラバンのリバック。夕食に外務省のマナダール氏とリエゾンを招待。折よく来合したスキー隊の加藤、安久両氏を紹介しました。

三十一日、出発を明日に控え、日本大使館へ挨拶、午後毎日新聞の二名もパームット入手。H・Sでは一、〇〇〇ルビーの手数料を支払い、メイランナーを二人一組契約しました。(月契約で月給二八〇ルビーと一日五ルビーの食事代)他の一組はナムチュで備

う予定。ルクラまでのチャーター機は、先発の二フライトがリスクをみて三八〇米ドル、後発の三フライトは三五〇米ドル。(昨年は三〇〇ドルの由)

九月一日、全員五時起床、外は小雨。五時半シェルバ集合、六時空港に向う。とても駄目だと思っていたが、段々好天のきざしが出て第一便が八時四十分スタート。田辺、植村、リエゾン、サード、キルケン、アン・ナムギャ

ルの六名と約一・三トンの荷物、十時十五分帰着。機長は非常に悪いコンディションであるが、何とか着陸出来た

とのこと。二便は種々と対論の後、や

っとトライして呉れることになり、十

一時スタート。夢か嬉んでいる中に

段々と雲が多くなり、そろそろ上空と

思ふ頃、グルグル旋回、パイロットは

地図を片手に何回もトライしたけれど

到々駄目、十二時三十分、カトマンズ

に帰着、This Expeditionの実感が

ありました。

〔第五信〕 ルクラより九月四日付。

九月一日は第一便が出たあと、二日は飛行スケジュールが一杯、三日は一日中雨でフライト不能。

四日。曇天なれど強引に飛んでくれることになり、九時スタート、雪量は一日の日よりも多く、パイロットは酸素を使いながら五、五〇〇mまで上昇、待望のエベレストも望めました。現在雪高は四、〇〇〇〜五、〇〇〇m、モンズン中でもそれ以上は快晴で、モンズン中の高い山の登山は結構良いのではないかと思います。

ルクラ上空は一面の雲、二回程旋回後強引に着陸開始、(ツインオッター機)ワンバウンド、ツウバウンド目に柔かい芝と泥に前輪が折れてスロトビ、機首を泥の上に突込みました。約50mこすって止まりましたが、かなりのショック、荷物が全部前に押しつけられ、操縦席の後方に特別に座らされた木村カメラマンは機首内にとびこんでくる泥に呆然、エアー・ポートがやや上向きの傾斜のため、ドンデン返しにはならなかったものの一瞬ビクッりました。

結局機首の下部が少破、前輪がなくなったので、ナムチュエに無電を打つためシエルパをばったり、飛行機の無電でカトマンズにコンタクト、多分明日にヘリがきて、パイロットの救出と修理の点検をしたいと思います。

今の状況では、一ヶ月以上は飛行不能だと思います。従って下記のように計画を一部変更し大使館松沢氏経由後完に連絡しました。

①先行隊は五日ルクラ発、タンボチュエに三日、ロブジエに四日休養のち九月十七日B.C入り、二十日より行動開始。

②カルカッタよりカトマンズ間をチャーター機にし、直ちにB.C向けキャラパンをスタートする。そのためシエルパ三名をタンボチュエより派遣し、九月十六日カトマンズで待機させる。

③今のところ後発のB.C入りは十月

十日と予想される。ピラタスボーダー機は輸送能力ないため使用を中止しましたが、NHKの二名は利用できます。まあ不幸中の幸いで、隊員一同カスリ傷位で全く支障ありませんでした。ここルクラは毎日雨で、雨の中のキャラパンスタートです。割合と寒く相当な覚悟がいります。

第二次偵察隊 参加シエルパ

サードー Mingma Tshering (Thame)

55 マカール、59 ジャヌー、60 ヨマル
チュリ、61 ランタン・リルン、62 マ
ンブール(千葉大)、65 ゴジエンバカ
ン、59 イエチヤ
モック Kiken Sherpa (Thame)
53 エベレスト、55 マカール、59 ガウ
リサンカール(福岡)、62 ジュガー
リ、64 ギャチエンカン

シエルパ Dawa Tenzing (Nanche)
60 アブ、61 マカール、63 ミエベス
ト、65 印エベレスト最終キャンブ
同 Nawang Iie (Khunlung)
65 印エベレスト最終キャンブ他

同 Tenzing Zambu (Khunlung)
63 ミエベス
同 Ang Dorje (Khande)
53 英エベレスト、61 ゴジエンバカ
63 ミエベレスト西後、三〇〇m

同 Dawa Thundup
54 チョー・オニ、55 独アナンブル
ナIV、58 ダウラギリI、61 マカール
I、63 ダウラギリII峰

同 Pasang Norbu (Nanche)
59 ヒタルチュリ、61 P-29、62 ムク
ト・ヨマル、63 バルンツェ、69 第
一次エベレスト偵察隊

同 Lhakpa Norbu (Thame)
59 ヒタルチュリ、61 エベレスト、65

エベレスト(サウスコルに計四回)
69 エベレスト第一次偵察隊
同 Mingma Sherpa (Nanche)
64 ギャチエンカン、65 ローツェ・シ
ヤール
同 Ang Namgyal (Thame)
キッチンボーイ Sona Gyas
(Khunlung)

一九七〇年春本隊用 の予約シエルパ

1. Sirdar, Ang Tharkay
2. Sirdar, Chohate
3. Pemba Tenzing (Khunlung)
4. Nawang Iie (Khunlung)
5. Dawa Thundup (Khunlung)
6. Tenzing Jangpo (Khunlung)
7. Karma Thile (Nanche)
8. Phurkips (Nanche)

9. Nima Namgyal (Khunde)
10. Tshering Namgyal (Nanche)
11. Lhakpa Tshering (Nanche)
12. Nima Tshering (Porche)
13. Ang Pawa (Porche)
14. Lhakpa Tshering II (Khunde)
15. Dawa Sunder Chaurikharaka

16. Ang Namgyal (Thame)
17. Nima Putar (Lukla)
18. Ang Dorje (Ben)
19. Wangchu (Gomile)
20. Dawa Thundup (Nanche)
21. Ang Kani (Nanche)
22. Pasang Norbu (Nanche)
23. Ang Gelsen (Nanche)
24. Nawang Sanden (Khunde)

25. Ang Gelbu (Khunde)
26. Ang Rita (Gomile)
27. Kani Norbu (Pangboche)
28. Gyumi Dorje (Khunde)
29. Zangbu (Nanche)

31. Mingma Tenzing (Thame)
32. Lhakpa Norbu (Thame)
ネパール・ヒマラヤへ
の登山隊器材の通関

このたび八月二十二日付、外務省情報文化事業部長より、情文第二一九七一号をもって、在ネパール吉良大使からの公信として、ネパール政府より正式登山許可を取得した登山隊が持ち込む器材の通関手続きにつき連絡がありましたのでお知らせ致します。

昭和44年8月12日
在ネパール
吉良大使

外務大臣殿
ヒマラヤ登山の場合の登山器
材等の通関について(回答)

六月二十五日付電信情文第二八八十三号に關し、ネパール政府より正式登山許可を取得した登山隊の通関手続きについて左記の通り御報告申し上げます。
①登山に必要な登山器材・食糧品等をネパールに輸送するために、まずネパール外務省より Import License を取得する。Import License の申請に要する事項は、①バックギン・リスト八通(器材の原産地・価格を明記のこと)②CIFカルカッタ価格③船積みに関する事項(船名・出港地名・カルカッタ港到着予定日、ネパール・サイド到着予定日および入国の場所)
②Import License 手続きの手数料

器材の Rs 1 から Rs 5,000 まで
総額が Rs 5,001 から Rs 10,000 Rs 30
Rs10,001 Rs 25,000 Rs 55
Rs25,001 Rs 50,000 Rs 80
Rs50,001 Rs100,000 Rs130
十万ルピーを超える場合は、一万ル
ビーにつき三万ルビーずつ手数料が加算

される。なお手数料の支払いは原則としてドル払いとする。

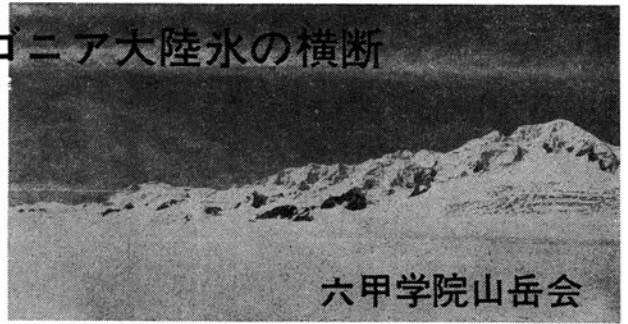
③Import License を取得した後、そのライセンスをもってカルカッタでの通関を行い、全器材にシールをしてからネパールへの輸送が認められる。カルカッタでの通関は信用のおける通関業者に委託することが望ましい。ネパール側にトラック、汽車または、飛行機で輸送された器材は税関でシールをとり、通関を行い、通関規則(別添)に定められた関税が課せられ、その金額を税関にデポジットする。飛行機輸送の場合はカトマンズ空港税関で通関を行い、陸送の場合はあらかじめ入国地点をネパール外務省に知らせおく必要がある。また、特にカトマンズでの通関を希望する場合には、国境税関への申し立てにより手数料(一梱包につき二十ルビー)を払い込み、荷物にシールをしたままカトマンズまでの輸送が認められ、カトマンズ空港の税関で通関を行なう。

なお、Import License の写しは、ネパール政府よりカルカッタ税関内ネパール・セクション、カトマンズ空港税関、登山隊指定の国境税関に送付される。

④陸路輸送の場合、カルカッタよりチャーター・トラック Doors Transport, Nepal Carrier 等の運送会社があり、それぞれカルカッタ、ネパール側の国境各所に出張所を持っており、ネパール側の通関事務の代行も行う。にて、隊員がトラックに便乗して器材の輸送にあたるのが望ましい。カルカッタよりカトマンズまでの所要日数は四〜六日間。

⑤Import License によりネパールに輸入した器材を再輸出する場合は、あらかじめ再輸出する物資のリストを作成(品物の原産地、価格を明記のこと)(9ページへ続く)

パタゴニア大陸氷の横断



六甲学院山岳会

九死に一生という言葉があるが、これほど六甲学院の大陸氷横断隊に当てはまる言葉はあるまい。だが隊長はじめ隊員一同の協力一致によってよくあの聞きしにまさる困難と酷しさに打勝ち、一名の落伍者もなく、無事アルゼンチン側に下り得たことは、いくら賞讃しても賞讃し足りないのではあるまいか。

ここでは紙数の都合で多少報告よりも簡略化した、その苦心のほどはよく察せられると思うし、僥倖を期したり、軽い気持ちでこういうところ

〇〇〇 Lautaro 〇〇〇〇〇
〇〇〇 Punta Brava, 〇〇〇〇〇

へ出かけたなら、それこそひどい目に遇うであろうことを、よく読みとって頂きたい。(吉沢)

隊長 阪上秀太郎(43)

隊員 井川 勲(27)

松永公雄(27)

岩田修二(22)

前川弘幸(21)

一九六八年

11・12 全員羽田空港発

11・14 チリ・サンチアゴ着

11・21 一部ブルート・モンへ先発

11・29 三島丸(川崎汽船)バルパライソ入港、装備及び上陸用ラン

12・5 通関完了。

12・8 全員ブルート・モンに集結

12・13 チリ海軍アギラ号に便乗、京大隊も同乗。

12・22 ブエルト・エデンに集結。京大隊も滞在。

12・24 エデン対岸のピークに登り目標の大陸氷床とリン・パトロンを遠望する。

12・25/26 エデン近傍のピークを偵察、試登する。

サンチアゴにてチリ大学を訪問、シブトンと行を共にした、マラングニシュ、ガルシア両氏に会う。ガルシアの言うには、ピオ11世水河は、フィヨルドに押し出し

ており、ルートとしては不利とのこと。彼は一九六三年にエクスマウスに來ている。

一九六九年

1・5 バレマユケル神父、ラン

チと共にエデンに到着。

1・6/7 荷物をランチで、フィヨルド・エクスマウスの上陸地点に運ぶ。

1・8 登山行動を開始。

われわれが万一反転することにな

Exmouth川付近略図

(上陸点より氷床まで) 1月6日~1月26日
六甲学院山岳会 パタゴニア登山隊 1969



った時のことを考えて、神父がランチで1月25日、2月3日、18日の三回、上陸地点へパトロールにくることを約束した。

1・9/24 この間、氷床まで距離五キロ、高差一四〇〇m。連日雨の中を荷上げ。24日、C4を氷床の上に推進。ここまでは原始森林、湿地のカール台地、最後は急峻な雪の斜面。

1・26 氷床C4へ荷上げ完了。

1・27 機(日大GL隊のものと同じ設計)を組立て、ルート偵察。

1・28/30 連日雪又は曇。コンパスで二〇度の方向に機を進める。視界50m。荷が五〇〇キロあるので機で二回に分けて運ぶ。デポを出し、テントを出す。苦しい作業。但し風はまだそれほど激しく

ない。気温高く(日中約一〇度)雪が溶け機重く、全身びしょ濡れ。だが特製の雨具が威力発揮。

1・31/2・2 この間、珍らしい快晴に恵まれる。北からラウタロ、マリノ・モレノ山脈(最高峰はフランススコ・モレノで、フランス人がアルゼンチン側から登っている)が一望のうちに。行く手、南方にはリン・パトロンの山塊が手に取るように見える。西側は氷床縁辺の雪の丘陵が連なり、南西にはHPS10氷河の源頭が地平線を描く。二日には西方に蟹気楼を見る。C7設置。ここまで氷床は平坦、高度一三〇〇m。

2・3/5 天候再び崩れる。傾斜が出てきた。5日機曳行不可能となりC8設置。ガスの切れ目にコルがチラチラ見える。ルートの左右クレバス多し。荒天の場合、ルートの確保が重要である。高度一五〇〇m。

2・6/15 デポの回収、逆風激しく一日一回がやっと。9日に回収終了、コルへの荷上げを始めようとしたが吹雪で思うにまかせず。11日積雪1m。テントを張り直し荷物を掘り出す。コルへのルート偵察、案外距離あり。

12日から荷上げ開始、二七〇m登った所にデポ。15日、やっとC9をコルへ出す。高度二一〇〇m。しかも午後から晴れ始めたので、C9からリン・パトロン主峰への攻撃を可能と考え、午後四時、二名ルート偵察、三名は下のデポから用具運搬。明日を逃せば登頂の機会は去る。歯を食いしばって強引に登頂体制を整える。

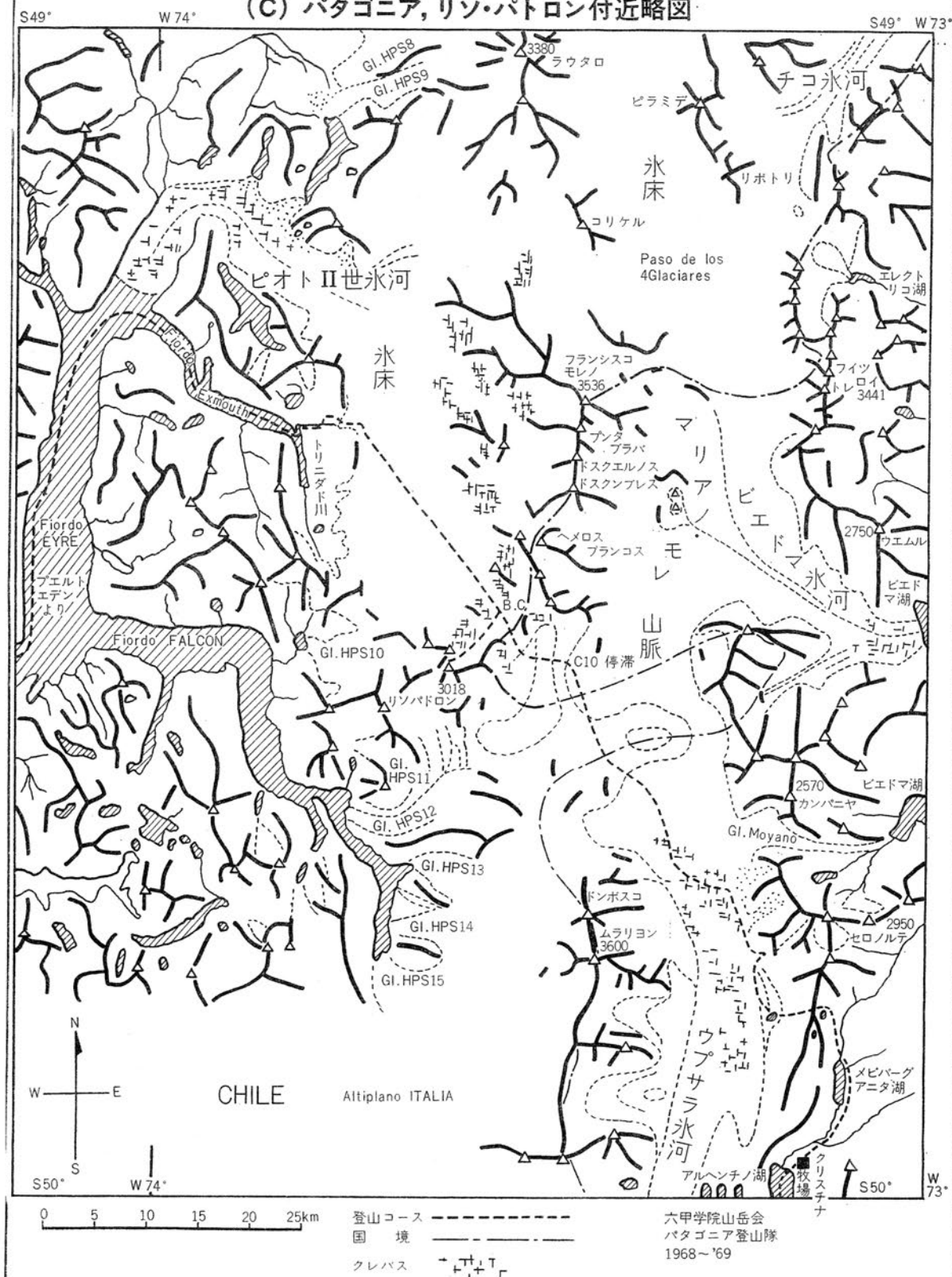
2・16 朝8時、松永、前川隊員テントを出発。その直後にトランシーバー破損、連絡不能になった。トランシーバーはずっと不調。原因はアルカリ電池が、使用を始めるに破裂する。そのショックでトランシーバーも壊れる。アルカリ電池は注意を要する。

しかし今日は晴れている。頂上付近は少しガス。

C9から上は幅三キロのグラトである。スキーで南西に向う。六つのピークのうち、一番奥のものを主峰とみて四時間進む。P4の下でスキーをデポ、ワカンとアイゼンをつけてP6を目指す。約30/40度の雪の傾斜。30cm下は堅氷という悪条件、ルートは難しくな。約3時間の登高で頂上に出る。約二九〇〇m、午後3時35分。だが登頂してみるとP5の方が少し高かった(三〇一八m)。残念である。登り直すには天気が保つまい。アルゼンチン側の山々が黒く見えた。フィッツロイも見え。午後9時10分、二人はテントに帰着した。

2・17/18 17日はガスとなる。デポ回収。18日にコルを越えてアルゼンチン側へ下降の予定が猛吹雪となる。ここで初めてわれわれはパタゴニア風と見参。まるで風洞実験の風のように、息もつかない

(C) パタゴニア, リソ・パトロン付近略図



吹き方である。テントも荷物も固い氷に覆われる。

2・19・28 19日や風が衰えたのでC9を撤収、荷物と櫓を氷の中から出す。大変時間を食った。撤収中、不注意からテントのポールを折ってしまった。止むなくテント一張りを放棄。

漸く櫓をひいて南へ向う。もう荷物も櫓一台分となる。視界が利かないので二〇度の方向に進む。プラトを横断して下降にいかると、櫓が滑って前に出るのを全員で必死になって支えながら下る。

風は下るにつれて激しさを増した。午後三時頃、前面に黒い山影あり、ルートが疑わしい。而もヒドン・クレパスが出来る。猛吹雪の中で立往生。遂にその場にC10を設営(高度二〇〇〇m)。四人用テントに五人が入る。そしてこの日から10日間、われわれはここから動けなくなった。22日午前中は風雪が少し緩んだので荷物を掘り出す。そして航空写真によってアルゼンチン側の山容を確認し現在位置を知る。ウブサラ氷河とヒエドマ氷河の分岐点の少し上方に在る。しかし午後からは吹雪。24日朝、テントは完全に埋没。一日かかって入口の雪をどけ、その上にツェルトを張って旗竿で固定、入口の埋没を防ぐ。瞬く間にツェルトに雪が積もり入口にトンネルが出来た。一方必死で櫓を掘り出そうとしたが、雪の積る方が早い。

25日、雪の下でテントを抜け出し、その跡を雪洞にする。既に3mの雪の下になってしまった。何もかもがぐしょ濡れ、寝袋は絞れば水が出る。櫓の発掘が不可能と

なったので、リュックで下ることになる。食糧、テント、ザイル、ビッケルのみを持参することにし、一人の担荷重量を20キロに抑える。一体いつ晴れるのか。今までの経験では、パタゴニアの荒天の周期は一週間乃至10日である。とすれば今月末には良くなるはずである。

28日、食糧は余すところ七分となる。こすすとい毎日二食に減食していた。クリスチナ牧場まで七日はかかると思われる。どうあるとも明日は脱出と決める。隊員一名が痔を出しているのが心配である。

3・1 既に三・五〇mに達している雪の下から這い出す。外は相変わらずの吹雪だが、風は大部弛んだようだ。40mのザイルに繋がってまた二〇度の方向に突進する。



双頭の山は DOS CUMBRES
右端は GENEROS BLANCAS の峰
左の高さは PUNTA BRAVA

二〇〇mも下ると雲が切れ始め視界がきいてきた。屋過ぎには氷床に出た。靑空がのぞき出した。助かったのである。遠く北方にフイツワットのピークも黒く見える。勇を鼓してウブサラ氷河を目指す。ところが隊員の痔が悪化し、進行速度はぐんと落ちる。

午後7時遂にストップ。C11を設営。前方にヌナタグが黒く映えている。高度一七〇〇m。
3・2・4 二日ウブサラ氷河に入る。縦横に走るクレパスを避けながら、病人を抱くようにして下る。行程の渉ぬこと甚しい。

三日にはクレパス帯を出て氷河上に水の溜った所を過ぎ、初めてみるベニテンテスの林を抜けて左岸に達す。40日振りに土の大地を踏んだ。
四日はここで休養、対岸にムラリヨンが見える。もうシブトン、ルートに合った筈だ。未踏地域はここで終ったのである。

3・5 テント撤収、雪が降り出した。再びウブサラを下降。この辺からクレパスは規模が大きくなり、波のようにうねる。アイゼンに棄てて上り下る。際限もなく怒濤のように連なる氷壁を一つ一つ乗り越えていく。

午後遅く、やっと氷河縁辺にカール状の池を発見。左岸の岩尾根もここで尽きている。われわれはここをクリスチナへの下降口かと思つた。(ここはシブトンが氷河を離れた所ではなく、そのもつと上流であつた)泥だらけの水の上にC14を設営。高度七〇〇m。

3・6 テントを放棄する。今日中にはクリスチナへ着けるだろう。まず正面の岩尾根を越す。C14



RSO PATRON 全景、主峰は見えない。
FEB. 2, 1969

暮れ、岩陰にビバーク、湖の波音が高い。
3・7 朝、最後の朝食をとる。地図上では今日中にクリスチナに着くことは確実と思えたので、悲壮感はない。

岩棚がつきると草原へ出た。湖から流れ出す河に沿って南へ向う。やがてアルヘンチナ湖が見え始め、赤屋根の建物も見えた。クリスチナである。午後三時過ぎ遂にそこへ着いた。マスタース父子に心よく迎えられ、61日に及ぶパタゴニア氷床横断の旅は終わった。

以後の行動
3・11 牧場のランチでアルヘンチナ湖を渡り、カラファテ着。
3・12 自動車でチリ国境に近いカシチア・カレラに着く。
3・13 東大探検部の車と逢う。チリ側に入り、セロ・カスチリに一泊。

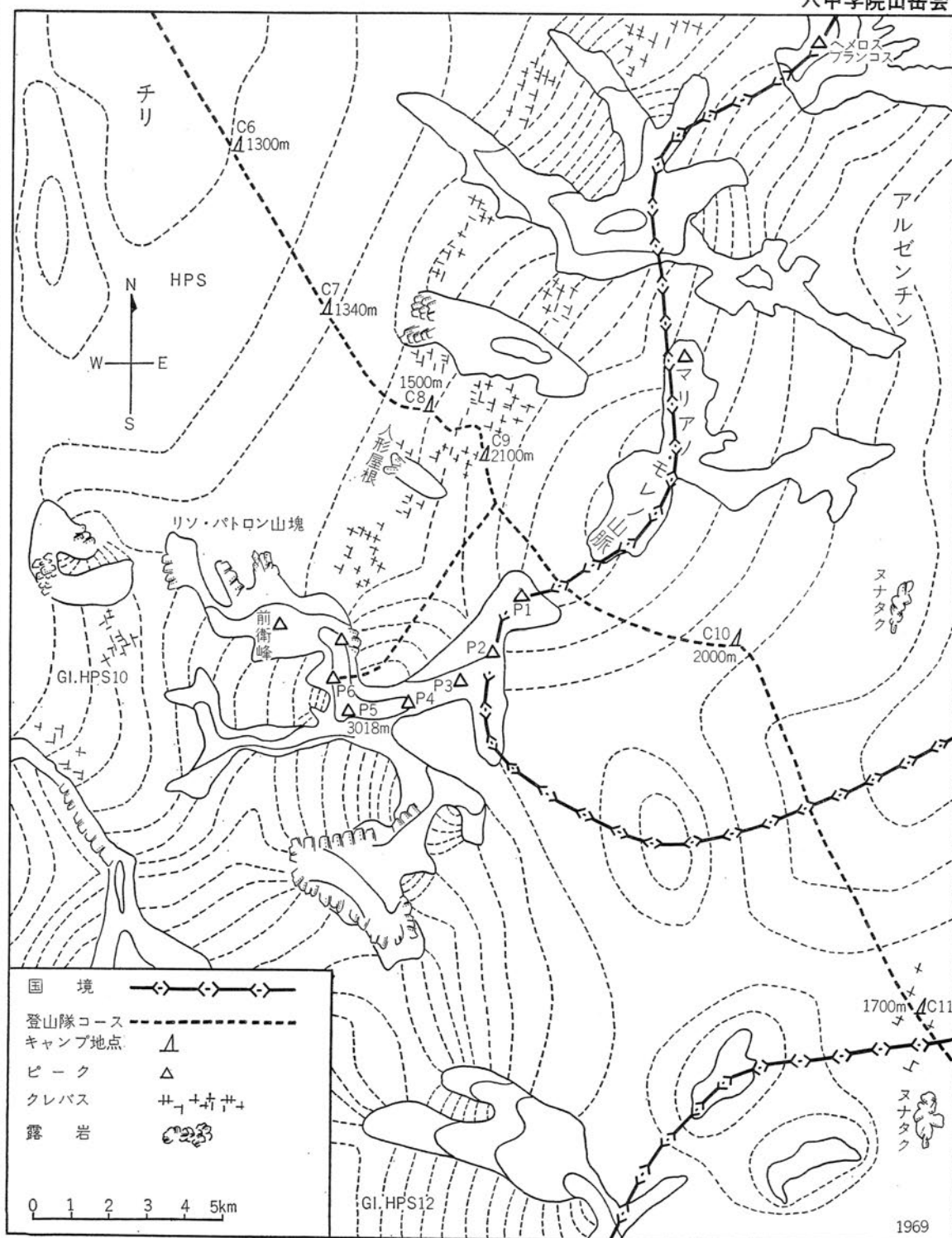
3・14 ブエルト・ナタレ。
3・15 ブンダ・アレナ。
3・17 全員飛行機でブエルト・モンヘ。エレメンケル神父と再会。
3・22 全員、サンチアゴ集結。
3・23 隊長、サンチアゴ発。
3・27 隊長、羽田着。

3・25、装備の大半を放棄したので、クリスチナ到着の時は全量45キロになっていた。
・テントはシブトンの説をとって三角のピラミッド型にした。内部は多少工夫したが、この型のテントなくして今回の氷床横断は不可能であつたろう。雨と雪と風、そしてこの雪量に対して、この型のテントは充分にその役割を果たしてくれた。

・詳細な報告書は全員帰国を待つて秋頃刊行の予定である。

(B) リソ・パトロン付近略図

六甲学院山岳会



新・爺蘭土雜記 ②

藤島敏男

過疎の天国 平素から私は人混みが嫌いだが、日本ではどこへ行っても混み合っていない所はない。一億総混雑というのだから。山へ行けばとおもいますが、これがまた油断がならない。場所によっては、山の中まで大衆が押しよせて、酷い目に会うのである。そんなに人がイヤなら、アフリカの砂漠へも行けばよいのだが、生活の不便不自由がひどく、酷熱とては到底辛抱出来るものではない。

N・Zは人口密度が低くて、気候は地球上で最も好国、それに生活水準は北欧三國並み、英米などよりも高いときいて、ホッとした。しかしに人は少い。総人口二百七十万位の約半数が都市に集まって、あとの百四十万が、日本の本州四國九州位の面積に散らばっているというのだから、その過疎ぶりは、チョット日本では想像もできないほどである。理科年表によると、人口密度一平方に、N・Z十人、スイス一四七人、日本、これは腹が立つたので調べなかつた。

JACクラブ・ソング

辻 莊一

会報「山」の八月一〇日号に坂倉登喜子さんが「ウェストン祭で唄う歌」の一文を寄せられ、そのなかにクラブ・ソングについての提案があった。これを読んでじっとしていられたくなくて、いそいでペンをとる。わたくしは日本山岳会のために大した貢献もせずしてただ長い間会員であったということだけで永年会員という礼遇を与え

た。

真夏のことで日中はかなり暑い日もあったが、南へ寄っているせいか、非常に乾燥しているの、いつも爽快だった。日本の夏の蒸風呂みたいな、イヤな気候はないようだから、N・Zには不快指数などという言葉は、おそらく存在しないだろう。もっとも蒸風の気候のおかげで、米が育ち米が食われるとあれば、文句はいえないが、日本国には気候以外にも、不快指数で表示したいような現象が、あまりにも多すぎるのは困ったことだ。この調子になり、いまは一億総不快ということになりかねない。

生活水準というものは、いろいろの要素が加わっているの、通りすがりの旅人にわかる筈がない。N・Zは一流だといえはみんな平穩に豊かにライフをエンジョイしているの、と推測しておくより仕方がない。日本へ来た海外の観光客が、日光箱根に遊び、東名道路を下して奈良京都を見物したところで、日本人の生活水準がまるであつたのと、同じことだろう。四面、海にかこまれてるのは、日本と似ているが、N・Zは、平原、牧場、草原、森林、河川、湖水、丘陵、水河、岩山、フィヨルド、こんな道具

られているのだが、何かこれにむくいることができないかと常々考えていたのだが、その機会が与えられたような気がする。何年か前のことがあったが、マナスル登頂成功の報がクラブ・チームにはいり、隊員一同が今夜羽田につくというとき、むかえに行こうとした会員がルームに集まって祝杯をあげた。そのときまたまた慶應の山岳部の歌をみなが知っていたので、それをうたったのだが、山岳会の歌があつたらいいのと思ったのはわたくしひとりではなかつた。これを出すについ

立のところで、羊と人間も住んでいる国だ。せまい国土に、溢れんばかりに人間がひしめき、突飛ばしたり、突飛ばされたりして、奮闘している日本とは、大分様子がちがうと感じた。英本国の百%舗装ほどではないにしても、道路もよかつた。人の住む気配もないところを、どこまでもどこまでも、センターラインをひいたハイウェイが延びているのだった。時速七十マイル、八十マイルのスピードで、危いと感じたことはない。近代産業のない国だから、大型トラックなど殆んど通らない。対向車も少いが、センターラインを跨いで走る車はみかけなかつた。日本のドライバより、衣食足っているのか、知能の程度がちがうのであろう。

野草の咲き乱れる草原、羊の群れる牧場、深い原生林、水河から流れる溪流、雪山の遠くに見える峠、静かな湖畔、そんなところで車をとめて、美しい自然をたのしみ、先へ先へと、旅の刻々に満足しながら私達は走った。どこにもベンキ塗りの立看板や広告、大小屋のようなバンガローのたぐいを、見かけないのもうれしかった。交代でハンドルをとった連中(九人中五人)は、御苦労様などといわれな

て、坂倉さんのあとについてクラブ・ソングを作ること提唱したい。おおぜいの会員のなかには詩をつくること上手な人もある。その人たちに好きなように作ってもらって、適当な方法で選択し、これに作曲したいものである。ここでおねがいなのだが、もし会員のみなさんが許して下さるなら、わたくしに作曲させてもらいたい。ただちょっと気がひけるのはわたくしはかなり長く作曲から遠ざかっていた、音楽学に専心しているから、資格において欠けるところがある。しかし

がら、日本では味えない快適なドライブを、大いに喜んでいたようだ。泊り泊りのホテルやモーター・インは、清潔で静かで親切であった。米國や濠洲からの団体客もあるが、数はすくなくった。名所旧蹟巡りならば、欧州へ行くだろうし、自然の風光がめあてでなければ、N・Zまで足は伸ばすまい。

過密の標本国日本で、押しつぶされそうになっている私には、過疎のN・Zはまるで地上の天国のようにおもわれた、というのが本音だ。こんなことを書く、過密こそ日本の強味、これこそ地上の天国、なにをいうかと、目に角を立てる向があるかもしれないが、そういう向は山開きに何千人の行列線に加わるもよからう、百何十張とテントの林立する仲間入りしてもよし、羊を洗うような海水浴場で泳ぐのもよし、せいぜい過密感を満喫せたいらいいとおもふ。見解の相違とか、好みのちがいは、どうにもならないことだから。

西海岸へ

アーサー・パスは背稜山脈を、車で越す峠としては一番高いようだが、三〇三フィートだから大したものではない。峠の上はモレーンと灌木、きの

う登ったマウント・ビーレイの頂上、はるかに望まれる。峠に建つ巨大な碑は一八六四年にこの乗越を、始めて発見したアーサー・ダドレイ・ドブソンの記念である。

峠からの下りは、アーサーがゴルジュとブッシュに悩まされたことが、うなずかれるような、兩岸のせまうた山合いであった。やがて広い川の流れて沿って、西海岸へと近付いていった。N・Z南島では、潮流の關係からでもあろうか、東海岸は西海岸より乾燥の度合が強いようで、自然の景観もずいぶん違ふ。

東海岸では、真夏というのに、草原や牧場の草が、まるで晩秋のように狐色をしているところが多く、不思議におもったのだが、峠ひとつで西海岸にきてからは、いたるところ緑の色が濃く、ことに海からあまり遠くないところには、美事な平地林がひろがっているのは、日本では見えない風景であつた。

フランツ・ジョセフ、フォックスの西水河は、丁度マウント・クック連峰の裏側へ突上っているのだが、観光客の水河見物の対象らしく、靴や杖や、合羽まで借物のお上りさんが、ガイドのを、一幅の古版画のようだと、眺めたりした。

フォックス水河は全長九マイル、落差九千フィート、末端は海拔六七〇フィートまでできていて、極洋やアラスカは別として、珍しいものであろう。青いアイスフォールをみせて、岩山のあいだを、はるかに高く、霧の中に没している水河を見上げて、タスマン水河への峠越えなどは、きつと面白いただろうとおもったことだった。地図には水河の上部にN・Z山岳会的小屋もあるし、主稜にはパイオニア・パスという乗越も記されている。

緑の中にはめこまれたような可愛いわな湖、美しい小石がいっぱいあって、女連が石ひろいに夢中になった静かな浜辺、そしていつも目に入る羊の群、人口が稀薄で、自然が大切にされていると、こうまですべてが美しいのであるうか。こうして私達は三日三日、たのしい旅の日を重ねていった。

(うぐく)

ニュージーランド登山 学校来夏のプログラム

在ハーミテージ

秋田しおみ

皆様お元気にてご活躍のことと存じます。このたび来夏(日本の冬のシーズン)の登山学校の予定表ができ上がりましたのでお送り致します。

参加を希望される方がありましたら左記へご連絡下さい。

◎今年十二月末日まで

Miss Shiomi Akita

c/o The Heritage, Mount Cook
New Zealand

(秋田がうる間は日本語での照会も受け付けます)

◎来年一月一日以降(英文で願います)

Alpine Instruction Ltd.,

P.O. Box 2377, Christchurch,

New Zealand

INSTRUCTION COURSES (教程の説明)

(各コースとも費用中には小屋代、食費を含みます)

① Mountain Holidays

(\$41=¥16,400, 6日間)

本格的な山登りはなっており、ハイキング、山歩きをしながら山の中の休暇をできるだけ楽しもうという方へ

② Basic Courses

(\$41=¥16,400, 6日間)
本格的な山登りを始めたいという方に最も基本的なことを……

③ Intermediate Courses
(\$48=¥19,200, 7日間)
ある程度経験のある方、Basic Coursesをすませた方がさらに腕をみがくために……

④ Advance Courses
(\$50=¥20,000, 7日間)
相当の経験のある方が最新の技術を身につけ、ニュージーランド・アルプスの峰々を思いきり楽しむために……

⑤ Guides and Instructors
Courses (7日間)
ガイド、登山技術のコーチを専門に受けた人たちのためのコースで、通常五年以上の本格的登山の経験を有する人のために。費用は経験等により異なります。

DATE SCHEDULE (日程)

11月15日 Guide/Instructor Course

28日 Advance Course

29日 Basic Course

12月5日 Intermediate Course

6日 Basic Course

13日 ——

20日 ——

27日 Intermediate Course

1月5日 Basic Course

12日 Mountain Holidays

19日 Intermediate Course

28日 ——

2月7日 Basic Course

14日 Intermediate Course

23日 Basic Course

3月4日 Mountain Holiday

14日 ——

INSTRUCTOR: (コーチ)

Mr. Bruce Jenkinson

Mr. Lynn Crawford

Mr. Peter Farrel

三人共海外遠征の経験を有し、ヒラリー卿の教えも受けており、現在登山コーチとして、ニュージーランドで最もすぐれているといわれ、ボール・ハットに住んで、コーチ、ガイドを職としております。

なおこれら各コースの訓練場所は、ボール・ハットを中心として行いますが、上級コースになるとクック山周辺の山から西側の山々も対象になります。

岡部浩子さんの遭難

岡部浩子さん(会員番号五八一〇)

は、去る八月十一日の集中豪雨のため黒部川東沢付近において同僚の福田善明さんとともに行方不明となり、勤務先の三菱商事山岳部が中心となって捜索を続けておりますが現在まで遺体、遭難品とも何ら発見されておられません。確認されたコース、遭難推定場所は左記の通りでありますので、この付近において何か発見されました場合は是非ご連絡下さいますようお願いいたします。

八月七日折立より薬師沢、八日高天原、九日広河原付近、十日東沢出合奥黒部ヒュッテに宿泊。翌十一日午前八時三十分、平への渡船場へ向って出発後消息を断った。当日の集中豪雨によって黒部本谷は横相が一変するほどの荒れ方をしていること、また小屋番、他パーティからの情報によって、二名は午前九時頃、東沢と東沢間において増水、鉄砲水により流されたか、あるいは山崩れのため埋没したものと推定される。なお、南沢岳にいたる尾根筋、湖面の捜索も行なったが手がかりになるものは見付かっていない。

連絡先 山口節子(千葉市黒砂四一九一十二)

カトマンスより

薬師義美

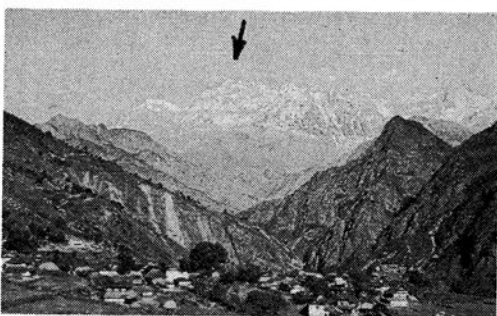
八月二八日に当地に入りました。船荷が一〇日も遅れていますが、一四、五日はボカラへ行き、月末にはBC入りとみています。

目下日本隊のほか、イタリア(チェレン)、オーストリア(D-4)、チエコ(A-IV)、ユーゴ(A-II)と来ています。ユーゴの隊長にはあいました。ネ政府は近く数隊解禁し、リストに加えるようです。でもニルギリは二年先とみています。ではいずれまた。

九・一〇、カトマンスに

(吉沢宛)

追・矢印はグルジャです。



(セーリから)

とし、再輸出する時に税関に提出する。その際、先にデポジットした関税より再輸出される器材の課税分の返却を受ける。再輸出に関する規定は通関規則(別添)による。

Nepal gazette-3

Part 15, 1966 April, Kathmandu.
Ministry of Finance
His Majesty's Government of Nepal
According to Custom law of 1963 of H.M.G. Custom fees has to be paid by Mountaineering Party or Research Party or fully for the following items.
1. Complete list of the goods should be produced to the Custom office, custom fees has to be paid. As deposit for all the goods brought by the party. The deposit will be returned back at the time of leaving Nepal. But, if the party fails to present any goods according to list. Custom fees has to be paid.
The deposit can be made with check (Foreign Currency) or cash.
2. Except liquor, beer, wine and cigarettes, Custom fees, which shall not be more than 10% will be charged for the following items.
(1) Food.
(2) Drinks.
(3) Medicine.
(4) Film, Camera, Radio, Binocular etc.
(5) Battery.
(6) Mountaineering Equipments.
(7) Camping Equipments.
(8) Packing Materials.
(9) Scientific Equipments.
(10) Dress.
3. This facilities will not be given to other parties who have not entered into an agreement with the Government.

図書室便り

新刊図書受入報告 (昭44・8)

実業の日本社寄贈

(1) 小林経雄著『妙高・野尻湖・戸隠』

(ブルーガイドブックス 50) 昭44・7

増永通男氏寄贈

(1) 広島大学ヒンズークシニ遠征隊著

『ヤシエン峯登頂』昭44・8

あかね書房寄贈

(1) 佐伯富男著『山と雪と生きる』昭44・8

西丸震哉氏寄贈

(1) 西丸震哉著『さらば文明人—ニエギニア食人種紀行—』昭44・4 講談社刊

エベレスト準備委員会寄贈

(1) ヴァルテル・ブレンドル著 加納巖

訳『高所順応と高山病』昭44・8

定期刊行物受入報告 (昭44・8)

(部報・金報類)

(1) 岩友会ネーブルニトラヤ遠征隊

報告 No. 10-12

(2) 『兵庫山岳』No. 27 44-8

(3) 『国立公園』No. 236 69-7

(4) 『明峰山岳会報』Vol. 39, No. 2, 3, 4

(5) 『日本職業スキー教師連盟ニエス』No. 1-2

(6) 『山麓』No. 472 44-8

(7) 『自然保護』No. 86 69-7

(8) 『低山』Vol. 8, No. 49 69-7

(9) 『山』No. 446 69-8

(10) 『山と雪』No. 136 44-8

〔雑誌〕

(1) 『アルプ』No. 138-139 69-8, 9

(2) 『アルプス』Vol. 3, No. 2 44-8

(3) 『岳人』No. 267 69-9

(4) 『HIKER』No. 167 69-9

(5) 『山と溪谷』No. 372 69-9

Journal Arrived in
September 1969

1. 『Die Alpen』Jahrgang 45, 7, Juli 1969.

2. 『Alpinismus』Jahrgang 7, 6, Jahrgang 7, 7, Juni 1969, Juli 1969.

3. 『Der Bergsteiger』Jahrgang 36, Heft 6, Jahrgang 36, Heft 7, Juni 1969, Juli 1969.

4. 『The Canadian Alpine Journal』Vol. 52, 1969.

5. 『Deutscher Alpenverein』Jahrgang 21, Heft 3, Mai 1969.

6. 『La Montagne et Alpinisme』Année 95, No. 73, Juin 1969.

7. 『Mountain』No. 4, July 1969.

8. 『Österreichischen Alpenvereins』Jahrgang 25, Heft 5/6, Mai/Juni 1969.

9. 『Österreichische Alpenzeitung』Jahrgang 87, Folge 1365, Mai/Juni 1969.

10. 『Rivista Mensile』Anno 90, N. 5, Maggio 1969.

11. 『Verkehrsbuch』Ausgabe 39, Sommer 1969.

D. Z. (Z. 2)

暑さをすっかり忘れてしまったこのごろは、もう寒さを心配しなければならぬところになってきています。

東京の四季は、夏と冬ばかりで春と秋がないか、あっても大変短かいのは寂しい気がします。

さて、二十五日に予定されている図書交換即売会には、多数の方から出品になるだろうと、委員一同喜んでおります。当日は午後一時から三時まで、ルームにて開催しますので、是非お立ち寄り下さいませ。

雑誌欠号の寄贈お願い

名譽會員松方三郎氏からDie Alpen

とGeographical Journalを寄贈いただきましたが、左記の図書が欠号となっておりますので、もし、お手持の方においででしたら、是非、寄贈下さいませようお願い申し上げます。

記

1. Geographical Journal 1932 LXXX 6.

2. Part 1. 1951

イタリヤ山岳会フイレンツエ支部創立一〇〇年記念出版物の寄贈

イタリヤ山岳会フイレンツエ支部といえは、イタリヤ山岳会の中でも有力な支部で、フォスコ・マライニ氏もここに所属しています。

この度本会宛に左記のような嬉しい便りが届いたのでお知らせ致します。

驚いたことにイタリヤ語の正式書信と共にオルシニ会長署名入の日本語の手紙が同封されており、その親切さに目をみはりました。さすがにマライニ氏のいるフイレンツエだと驚いた次第です。以下にその全文を掲載します。

◇ ◇ ◇

拝啓、若葉が目にしみるころとなりました。その後はご無沙汰しておりますが、ご健健のこと存じます。

さてこのたび、イタリヤ山岳会・フイレンツエ支部が、創立百年を迎え、その記念に一冊の本を発行しました。中にはフイレンツエ山岳会創設以来の活動の歴史等が挿入されております。そこで特別版二百五十冊の内一冊を、同じ山を愛する仲間として日本山岳会の方々に読んでいただければ大変嬉しく思います。

まずは取急ぎご通知まで 敬具

五月二十日

Emilio Orsini

日本山岳会会長殿

九月理事評議員会

(四日七時、本会ルーム)

出席者 三田会長、吉沢、深田、副会長、飯野、小倉、山崎、松田、藤田、広谷、原、野上、長尾各理事、石原、藤井、高山、織内、折井、後藤、沼倉、金坂各評議員

△議事および報告

△エベレスト関係

今西評議員、大塚理事がカトマンズに行きエベレスト登山許可の再確認を行なってきた。四月四日付けで正式許可されており、何ら問題はなくネパール側の受け入れ問題はすべてクリアした。

資金は国庫補助八百五十万円が正式決定、またNHK理事会でも後援が正式決定した。

第二次偵察隊は全員ルクラに到着し行動を開始している。

②北海道支部設立の件 (飯野)

七月二十日札幌で設立総会を開き、東京から藤井評議員が出席し、中野支部長以下の役員も決定した。支部設立規約に基づき、設立を承認する。

③年次晩さん会の件 (飯野)

十二月五日赤坂のマッパ・サロンで開催する。会費は二千元。なおこの一本展はエベレスト関係にしぼって行なう予定。

④女子登山研修会の件 (小倉)

岡部浩子氏遭難の件 (小倉)

⑥ヒラリ・御来日の件 (松田)

明年七月十七日に来日と決定したので、会から正式に招待状を出す。

⑦シエラクラブ来日の件

九月十四日・十五日・日光の光徳小舎で歓迎会を開く。

第二五四回小集會報告

第二五四回小集會は九月十一日午後

六時半から「日大グリーンランド横断の記録」を行ない盛会であった。

七月海外連絡委員会報告

(七月九日六時半、本会ルーム)

出席者 折井健一、関口周也、田村俊介、芳野越夫、堀川英司郎、牧野文子、鈴木邦子、松田雄一の各委員。他にシエラクラブ関係者として次の各氏が出席した。

小島南、佐藤之敏、寺田昌正、河村憲一、田村英也(山梨支部)、小川勝(信州O.B.)、西郡光昭(信州大O.B.)、佐々保雄(北海道)、溝尾良隆(J.T.B.)、鶴巻吾吾(J.T.B.) 以上18名

△議事

①本年度海外連絡委員会行事予定検討の件

②シエラクラブ一行の案内に関する打合せの件

本会よりシエラクラブの各隊につくガイド(コーディネーター)の責任分界点の確定、相互連絡、調整等についての最終的打合せを行ない、受入態勢の検討を行なった。

なお本会との交歓会は、九月十四・十五日に奥日光光徳牧場で行うことと定める。

議事終了後、佐々保雄氏が滞米中参加したシエラ・クラブのアウトティングのスライドの上映があった。(Y・M)

スイス山岳会会章の寄贈

この度ジュネーブ在住のセシアノ氏が、本会ルームを訪れ、同山岳会のバッジを寄贈した。

本会ではこのバッジを談話室の外国山岳会のバッジの額におさめて保存することにした。

Jean Sessano, 12 rue General Dufour GENEVA, Switzerland.

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

ルーム日誌(44年8月)

1日(金)臨時理事評議員会
 6日(水)日本協会ネパール語講習会
 8日(金)エベレスト委員会
 11日(月)高千穂南大OB会
 16日(土)エベレスト準備委員会
 22日(金)第二次偵察隊慰送会
 八月(金)暁峰岳友会会合
 八月中来室者 五〇八名

バキスタン政府の 登山許可について

外務省情報文化局文化事業部長から
 七月一日付、情文二第一三二九号をも
 って、本会宛左記の注意があった。

× × ×

今般在バキスタン會野大使より電報
 をもって、六月十四日バキスタン外務
 省は、日本大使館担当官の立会いを求
 め、福岡登山隊と連絡将校の会合を主
 催した際、同国外務省東南アジア課長
 は、昨年の日本登山隊の同国無許可登
 山及び今後の方針につき、左記のとお
 り述べた旨報告がありました。

つきましては、今後同国訪問の本邦
 登山隊に対し、バキスタン政府の意向
 至急周知方お取り計らいあるようお願い
 致します。

記

一、昨年日本の登山隊でバキスタン国
 政府の許可なしに登山した例があつ
 たが、これははなはだ非友好的な行
 為である。今後このような行為は、
 バキスタン側でも取締るが、日本側
 でも差しとめるよう要請する。
 また、登山隊が許可なしに来まし
 ても許可は与えないから、その場合
 はそのまま帰国してもらうほかはな
 い。

二、なお、昨年同国政府の許可なくし
 て登山したのは、以下の隊と思われ

る。

- ①日本学生ヒマラヤ学術調査隊(玉
川大学生他)
 - ②RCC第二次チトラル踏査隊
 - ③立教大学ヒンドウクシ学術調査
隊
 - ④日本婦人西アジア観望隊
- 〔備考〕一九六八年の無許可の登
 山隊が右四隊であるか否か確認し
 ておりませんが、外務省の原文通
 り掲載しました。

あとがき

ようやく秋めいてまい
 りました。会員各位にはそれぞれご活
 躍のことと存じ上げます。

小生は九月の連休に婦人部に引っぱ
 り出され、久しぶりに立山千寿カ原文
 部省登山研修所で開かれた女子登山研
 修会に行ってきました。八月の集中豪
 雨の跡はまだ生々しく残っており、富
 山鉄道は小見ま。後はバス連絡、藤
 橋はあとかたもなく流失し、称名川の
 河床はすっかり高くなっていました。
 夜は早速駅裏の「おでん屋」に出か
 けましたが、おかみさんの話ではこの
 夏はさっぱりだったとのこと、早く鉄
 道が通じてくれなくては、となげいて
 いました。剣沢小屋の裏手に今夏新設
 された研修所の前進基地はなかなか立
 派なものです。剣沢小屋も帰りにたく
 でしたが特別にお酒をせびって出して
 もらいました。(山崎)

昭和四十四年十月十日発行

東京都千代田区神田錦町
 三二二三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
 東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
 電話 (352) 1556・1557

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
 送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943)0311(代表)
 大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
 名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
 工場:大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
 日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀